

II-1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1998年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡5件、藤原京跡4件、飛鳥地域等15件である。学術調査は吉備池廃寺（桜井市教育委員会と共同）1件で、ほかは諸工事に対する事前調査である。藤原宮・京跡の調査件数が少ないので、1996年度から続く（仮称）万葉ミュージアム建設に伴う飛鳥池遺跡の調査に力を注いだためである。以下、主要な調査を概観する。

藤原宮跡では、西北官衙地区（第94次）、西面南門（第96次）の調査を実施した。西北官衙地区は遺構が希薄で、宮期の小規模建物3棟の検出にとどまった。西面南門は、西面大垣柱穴列が途切れる約30mの間に位置すると推定される。

藤原京跡では、右京八条一坊（第90次）で、坪内の建物遺構6棟の他、西一坊坊間路東西両側溝を検出した。

飛鳥寺では、万葉ミュージアム建設の事前調査（第97次）で、寺域南辺東半の大垣と外周道路を検出した。

飛鳥池遺跡では、前年度から継続の谷南奥部（第87次）で、工房址下層の状況を確認し、古墳時代の竪穴住居跡等を検出した。また谷中央部（第93次）では、谷口近くに3時期の埠と石敷き井戸、東岸に飛鳥寺東南禅院所用瓦の焼成窯、100基以上の工房炉跡群等を検出した。谷には炭主体の工房廃棄物が分厚く堆積し、ここから70点以上の「富本錢」が出土して、和同開珎に先立つ「最古の铸造貨幣」として注目を集めた。廃棄物層は全て土囊詰めで取り上げ、洗浄・選別を行っている。

吉備池廃寺（第95次）では、西面回廊と推定中門の調査を行った。推定中門位置に中門は検出されず、南面回廊が連続しており、伽藍配置の復原に課題を残した。

なお、発掘調査にともなう現地説明会を以下の通り実施した。

（長尾 充）

4月26日 飛鳥藤原第87次（飛鳥池遺跡）小澤 稔

10月18日 飛鳥藤原第93次（飛鳥池遺跡）花谷 浩

3月13日 飛鳥藤原第95次（吉備池廃寺）西口壽生

平城京の発掘調査

本年度の発掘調査は19件に上る。内訳は宮域内9件、京城内10件である。京内寺院域内の調査が6件と多いことが特筆できる。このうち、学術研究および史跡整備に関わる発掘調査は7件7136.5m²、住宅建設等による緊急調査は12件882m²である。

平城宮では、東院地区（第292次）において、3棟が連結した構造をもつ楼閣建物を確認し、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿と類似した施設が存在することが明らかになった。当地区には「玉殿」、「楊梅宮」として文献にあらわれる中枢施設の存在が推定されるが、これらが近隣に存在する可能性が高まった。

大極殿院の復原に関連して、大極殿西半部および西面回廊（第295次）、回廊西南隅（第296次）を調査した。

大極殿の規模、特に基壇に関する新たな知見を得、本格的にはじまった第一次大極殿地区の復原に有益な情報を提供できた。回廊部では大規模な木樋暗渠の存在が明らかになり、宮殿内の排水のあり方について情報を得た。

馬寮東方官衙（第298次）では、存在が予測されていた長大な礎石建物の規模を確定した。コの字型の建物配置をもつ大型建物群として「西池宮」として文献にあらわれる施設との関連を指摘する声もある。

平城京城は、寺院の調査が中心である。

興福寺では、平城遷都1300年にあたる2010年を目標に伽藍復興の計画があり、本年度より寺域内の調査を継続して実施することにしている。

中門の調査（第297次）では、規模や構造が明らかになった。また、絵図にみられる塑像の礎石や、地鎮を目的とすると考えられる遺構を発掘した。記録から、幾度もの焼亡、復興が知られるが、調査においても数度の改変